

イギリス文学史における歴史的文脈と作品の位置づけ

— 授業での実践と課題 —

松 浦 雄 二

(総合文化学科)

How Should Historical Context be Referred to for the Japanese Students
in an Introductory Course on British Literary History?:
A Review from the Classroom

Yuji MATSUURA

キーワード：文学、文学史、歴史的文脈、多様な文化

Keywords：literature, literary history, historical context, cultural variety

1. はじめに

筆者は、勤務校の前身である島根県立島根女子短期大学文学科英文専攻で8年間（「英米文学講読Ⅰ」ならびに「英米文学講読Ⅱ」、名称は「講読」であるが、イギリス文学史を含む）、島根県立大学として統合法人化による再編が行われたのちは、総合文化学科（英語文化系）で10年間（「英米文学入門」のち「英文学入門」）、イギリス文学史を扱う授業を担当している。かつてはいわゆる「英文科」の学生が、再編ののちは、総合文化学科1年生が対象である。

学科生全体に提供する科目として、この教科をどのように位置づけるかは、常に課題となる。なぜなら、この授業は、かつての英文科の学生が履修した専門科目的なイギリス文学史の要素だけでなく、すなわち英米文学や英語文化を中心に学ぶ学生だけが履修する科目というだけでなく、専門領域の違う学生も多く履修するからである。

総合文化学科は専門系統によって、文化資源学系、

英語文化系、日本語文化系の三つの系に分けられており、それぞれに「教育課程編成・実施の方針」すなわちカリキュラム・ポリシーが定められており、それらは、図書館資格に関わるものを除くと、次の通りである（総合文化学科『平成28年度授業計画書』より。説明の便宜上同書には無い通し番号が振っている）。

文化資源学系

1. 地域の文化資源に関する基礎的な知識を身に付ける。
2. 学んだ知識を踏まえて、地域課題の探求および解決に向けた思考力と、観光・まちづくりへの活用力を培う。
3. 地域の人々の営みと出会って感動することができる五感力を身に付ける。
4. フィールドワークを通して文化資源を発掘する力と、その情報を発信する総合的な力を培

う。

英語文化系

5. 英語に関する理解を深めるとともに、読む・聞く・話す・書くの各技能をレベルアップする。
6. グローバル社会における文化の多様性に関する基礎的な知識を身に付ける。
7. 様々な文化に触れることを通して、物事を複眼的に考える力を身に付ける。
8. 実践の場で英語を用いることによって、生きた英語コミュニケーション力を身に付ける。
9. 異文化交流の体験を通して、グローバル社会で活動するための態度および行動力を培う。

日本語文化系

10. 日本語について理解を深め、確かな日本語力と豊かなコミュニケーション能力を身に付ける。
11. 文学を通してさまざまな生き方や考え方を知り、自己洞察力と他者への想像力を培う。
12. 日本人の美意識や生活様式など、日本文化の諸相について理解を深め、心豊かに生活する力を身に付ける。
13. 日本の歴史について理解を深め、現在や将来について広い視野で考えることができる力を身に付ける。

文化資源を(再)発見・継承しながら、地域文化と日英の言語・文化に関する学びを基軸にして、有機的な総合文化学の達成ならびに社会の求める知識・技能・実践力の養成を目指している総合文化学科¹⁾では、学生は上の三つの専門領域(系)の中から、各自が重点を置きたい系を選び履修することになっていて、カリキュラム・ポリシーは全体から見ると極めて多様なものになっている。英語英米文学の専門領域外の学生から見たイギリス文学史は、どのように展開されるべきか、イギリス文学の歴史的要素においては、どの時代のどの部分が当該授業においては強調されるべきか、小論は勤務校におけるイギリス文学史関連授業の展開についての報告である。

2. 「英文学入門」の目標

筆者の「英文学入門」授業では、次の二つの達成目標を設定している。

1. 英文学が展開していく歴史や思潮の流れを、自分なりに把握している。
2. 各時代を代表するような、あるいは各時代に特徴的であるような、作家、詩人、作品、ジャンルについて整理できる。

(総合文化学科『平成28年度授業計画書』より)

前後するが、まず達成目標の2について述べたい。目標設定に当たり、H. G. ウィンドソンの言葉は大変示唆的である。

教育において詩が果たす役割とは何か、私が述べて来た意味において、詩が個人の様々な経験を表象することを認めたとしても、人生において果たすべき実務に対し、詩はたしかに周辺的な重要性しか持たない。(中略) そうだとすれば、カリキュラムに詩を期待するのは不合理だということになる。(中略) カリキュラムは、社会の必要に応えるサービスを提供し、教育機関に在籍中、子供たちの学習が最大限効果的に実施されるように計画されたものでなければならない。子供たちの夢を実現し、共同体の要求に応えるためである。この目的を達成するためには、第1に個人の成長に注意を払うことが不可欠であろう。しかし、それは目的のための手段としてであって、それ自体が目的となるべきではない。つまり、注意を払う目的は個人の成長であって、最終的には、物質的利益や制度上の見返りを期待するような投資であってはない²⁾。

言語教育にも業績のある文体論研究者ウィドソンのこの言葉は、「詩」とある部分をそのまま「文学」や「虚学」と変えても成立するであろう。実学系で無い限り、大学で学んだことが直接すぐに実生活の目先の役に立つことは無い。そもそも、学問の多くの部分はすぐにたちまちには実生活には役に立たな

い。学生たちは、卒業すれば、「、、を勉強したんでしょう？」という、素朴な、だが場合に拠れば意地の悪いことさえる「社会」の期待に、晒されることになる。卒業しても在学中でも、総合文化学科生が社会に出て、イギリス文学史を学びましたと人に伝えた場合、その証しとして先ずどの時代にどんな詩人・作家が生きていてどんな作品を書いたかをスラスラ並べることができるとすれば、おそらくそれだけでも学生としての自負が感じられるはずである。だが、教育の目標は、そのようなささやかな自負をさらに進めた先の、大学で得た知識を契機としての人間的成長である。それは卒業後にさらに続いていくのである。続いていくための燃料となるものを、学生の時に提供できるか、そのことが文学教育が成功するか否かの大きなポイントであり、また文学（日本語で書いてあるかどうかにかかわらず）は、実学系の学問ではカバーできない独特の領域を持っていると言える。そのような要素を踏まえた上で、改めて考えれば、「虚学」であるのだから、すぐ役に立つか立たないかは中心的なことではなく、学生自身の、自分が学んだという自信につながるものが重要視されるべきである。実学であろうが、虚学であろうが、学生が自ら学び、学び得たという自覚を持ち、社会生活を自信をもって送る、上記授業目標2は、そのような、日常の中の学生の姿を想定したものである。暗記が中心となるはずで、とにかく「丸暗記」というだけで安直に否定的な考え方で結びつきやすいが、例えば丸暗記を通してでも、自分がどのように習得しようとしたかの自覚、特にそのような自覚を得させることが学生には必要と思う。

3. 総合文化学科のカリキュラムとイギリス文学史における歴史的文脈把握の重要性

上述の達成目標2における、暗記が重点となる文学史的事実の修得を、それではどのような歴史的文脈の中に位置づけるか、どのような文化的動向、社会的動向と結びつけて覚えるか、このことは、総合文化学科の各系のカリキュラム・ポリシーを考えるとき、いっそう重要となり、達成目標1に反映している。

総合文化学科のカリキュラム・ポリシーには、どの系にもあてはまる、あるいは通底する三系共通の認識が反映している。

その一つは、「多様性」である。「様々な文化に触れることを通して、物事を複眼的に考える力を身に付ける」（上記カリキュラム・ポリシー7、以下CP＋番号で略記する）という英語文化系のポリシーは、「文学を通してさまざまな生き方や考え方を知り、自己洞察力と他者への想像力を培う」（CP11）という日本語文化系のポリシーと共通項を持つ。また、総合文化学科は、学科全体としてフィールドワークを重視しているが、特に文化資源学系では、CP4に見られるように、学科の中でも地域へのフィールドワークを重要視する系であり、他の二系とは一見毛色の違うこの系においても、実際に地域に出かけていって、人々の中にある様々な考え方、それをもとにした様々な生のあり方を、五感を通して体験することで、もののありようの様々なあり方、すなわち多様性を理解することを重視している。これら人間と人間の住む世界の多様性の理解は、また上記CP9に謳うような、「グローバル社会で活動するための態度および行動力を培う」という考え方とも通底するものである。すなわちこれらは、「文化」への様々なアプローチを通じて学科のディプロマ・ポリシー³⁾に謳う「知識」と「技能」と「実践力」を養成するために不可欠なものとなっているのである。筆者の担当授業「英文学入門」において、上のディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーを踏まえてイギリスにおける文学史的な内容を扱うとするならば、社会の大きな変化・変質を生じた、まさしくエポック・メイキングな事柄・事件・事象の起こった時代の流れの中における文学作品生成の歴史とメカニズムを、強調すべきと考えている。すなわち人間の考え方なり、行動原理なりは常に変容を遂げ、さらにそのことが社会的な動向となって人間の社会のあり方や行動様式をも変えてしまう可能性が常にあるのは、そのような時代においてであり、そのような時代はつねに人間の様相、「あり方」に影響を与え、現代の社会や人の動きにも通じているからである。人間の様々なあり方への理解、それはすなわ

ち多様性への理解に通ずるものである。

4. 授業で強調している時代・内容と授業計画

上に述べた考え方から、筆者は次の①～⑤の時代の動向の中に、イギリス文学史的事実を位置づけようとしている。すなわち、①中英語の成立、②中央集権化から絶対王政への動き、③17世紀から18世紀にかけての市民社会の形成、④産業革命のあと人間の身の丈を超えた生産・流通システムをつくり、⑤その果てに人類が未曾有の世界大戦を経験するに至る19～20世紀にかけての、5つの時代の動き・流れである。授業ではこの5つの流れを強調し、それぞれの流れに合わせて、①英詩の父チョーサーの登場、②ルネッサンスにおける英詩の発展と劇場の隆盛、③ジャーナリズムと小説の勃興、④小説の発展、⑤20世紀初頭の詩と実験的小説、以上の5項目のイギリス文学史的事実を歴史の流れに位置づけて解説することに力点を置いて授業を行っている。すなわち①は、一地方の方言であったものがイングランドの母語として広まる中で、母語を用いて作品を書いているという気持ちは、いづれ確固たるものとなるnationalityの意識形成にも結びつくであろう。②は、国が中央集権化されていく過程で初期資本主義経済も発達させながら国力を高める中で成立し得るものである。③のジャーナリズムと小説は、絶対王政を否定した新しい「市民」が力を得て、政治的には立憲君主制のもとの議員内閣制度が整えられていくのと並行して、文学が新しい読者を獲得する中で成立したジャンルである。④については、小説が娯楽と教養を求めるさらに多くの読者を獲得しながら、一方で人間が、身の丈の力以上の動力や流通・生産の手段を得、技術革新を経て、いわば人間と人間社会が身の丈で持つことができる以上の自信を得て、環境や人権の観点などからは一種暴走して行き、社会を根本的に変質させていく。その中で小説は、変質する社会とともに、内容・形式を発展させていくのである。⑤では、イギリス文学は、19世紀の過剰な自信が生み出した「荒地」の世界について語らざるを得ないのである。人間がしでかす業の痕跡としての歴史、その動向の中で生まれる文学という位置

づけを強調することが、これからを生きる若い学生たちには、生きるための「教養」となるのではないだろうか。

5. 授業の進め方・今後の課題

授業では上のような5つの流れを強調するのであるが、もちろん、例えば16～17世紀ではトマス・モアやフランシス・ベーコンの散文などに触れないとか、19世紀では詩のことを扱わないなどということではなく、上の①～⑤を特に強調的に取りあげて歴史の流れを履修者に強く意識させようとする、ということである。以下は、筆者の「英文学入門」16回の授業計画である。

1. イントロダクション
2. 古英語・中英語の文学
3. ルネッサンスの散文と詩
4. 演劇の誕生
5. シェイクスピアの演劇
6. 清教徒革命までの文学
7. 王政回復期の文学
8. 18世紀の散文と詩
9. 小説の誕生と成長
10. ロマン主義時代の詩
11. ヴィクトリア時代の詩と散文
12. ヴィクトリア朝時代の小説
13. 第2次大戦まで
14. 戦後の文学
15. まとめ[補説]
16. レポート

(総合文化学科『平成28年度授業計画書』より)

この計画に合わせ、授業計画1～2回目の間で上の①、3～6回目の間で②(この中で、後の時代の作品理解にも必要な英詩の形式や隠喩についてなどの説明を、併せて詳しく行っている)、7～9回までの間で③、10～12回までの間で④、13～15回までの間で⑤を、それぞれ強調しながら進めている。

現在の授業においては、テキストに載っているものを中心に作品をできるだけたくさん取りあげ、時

には声に出して一緒に読みながら、詩や劇や小説の中の世界は、学生の日常世界といかにリンクするものであるかを示すことができるような解説ができることを目指している。上に達成目標2として挙げた習得させたい項目については、PowerPointを用いた空所補充式の補助教材を作成し、煩雑な作業になり過ぎないように注意しながら、できるだけ学生の手作業を与えるようにしている。授業で読む詩・劇・散文作品の原文にはしかるべき訳をつけているが、タッチパネル式のパソコンでMetaMoji Note画面を投影し、電子黒板的に用いて、英詩の英語原文の構造を説明する時や、簡単な韻律分析的な作業を学生に行わせる時の同時解説に利用している。

課題として、先ず、イギリス文学史は千年以上の歴史を持つので、どの詩人・作家、どの作品を取りあげるかは、常に迷うところである。上で述べた、歴史の流れとリンクさせて説明する箇所は、一つの絞り込みの方法であるが、これとても十分に膨大なものである。選別の原理を確立するための研究は常に怠らず行わなければならない。特に、19世紀以降の「科学」に対する人間の楽天的な礼賛的な捉え方、対し方に対して、やっと一般にも「再考」の気運が理解されようとしている現代の日本にあっては、科学の源泉・萌芽について大きな示唆を与えてくれるだろう16～17世紀のルネッサンス精神史と呼ばれる領域は、現在の筆者の授業では手薄になっており、今後にもっと盛り込んでいきたい。

注

¹⁾ 総合文化学科のディプロマ・ポリシーは、「島根、

日本および世界の文化について、有形・無形の文化資源や言語文化についての幅広い「知識」と国際化・情報化に対応した「技能」を身に付けるとともに、地域社会の活性化や地域文化の継承と発展に貢献できる「実践力」を培う」となっている。

²⁾ ウィドソン、p.96。

³⁾ 総合文化学科ディプロマ・ポリシーについては、注1)を参照。

引用・参考文献

- ウィドソン、H. G. 著、箕壽雄監修、川端彰監訳『文学と教育—詩を体験する—』（英宝社 2005）
- 川崎寿彦『イギリス文学史』（成美堂 1988）
- 齋藤勇『イギリス文学史』改訂増補第五版第四刷（研究社 1979）
- 坂本完春編『英文学を学ぶ人のために』（世界思想社 1987）
- サンプソン、ジョージ著、R. C. チャーチル補筆、平井正穂監訳『ケンブリッジ版イギリス文学史Ⅰ』（研究社 1976）
- 『ケンブリッジ版イギリス文学史Ⅱ』（研究社 1977）
- 『ケンブリッジ版イギリス文学史Ⅲ』（研究社 1977）
- 『ケンブリッジ版イギリス文学史Ⅳ』（研究社 1978）
- 杉本龍太郎、内田能嗣『イギリス文学を読む』（創元社 1994）

（受稿 平成29年1月23日，受理 平成29年2月7日）

